ヴォワール著作集

5

アメリカ その日 その日

Amérique au jour le jour

人文書院

ボーヴォワール著作集：第5巻

アリメカその日その日

This book is published in Japan by arrangements with Gallimard through Bureau des Copyrights Français.

© *Editions Gallimard*

初版発行日　1967年12月30日
重版発行日　1975年8月15日

訳　者　二宮フサ

発行者　渡辺睦久

装幀者　真鍋　博

印刷所　小林印刷所

製本所　坂井製本所

(分)0398(製)011005(出)3266

株式会社　人文書院
京都市下京区仏光寺高倉　TEL(351)3343・3391

ボーヴォワール著作集　第5巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

アメリカその日その日

エレンとリチャード・ライトへ

まえがき

私はアメリカで四カ月過ごした。わずかなものである。しかも私はもっぱら楽しむために、かつその時どきのなりゆきまかせに旅行した。だから新世界には私が垣間見ることさえしなかった広大な地帯がある。特に私はあの大工業国を、工場を見学することもなく、技術的成果を見ることもなく、労働者階級の人びとと接触することもなしに通り過ぎた。かといって合衆国の政治や経済が立案される上層部に入りこんだわけでもない。がしかし、私より消息通の人びとが描いたアメリカの全身像の大作とは別に、その国がひとつの意識——私の意識——に、どんなふうに開示されたかを日を追って語ることも、まんざら無駄ではあるまいと思う。

研究などというおこがましいことは企て及ばないかわりに、私はここに偽りのない証言を記すことができる。具体的な経験は主体と客体とを同時に包含するものであるから、私はこの記録から私自身を排除しようとはしなかった。ひとつひとつの発見が行なわれた際の、独自な、個人的な事情を考慮に入れない限り、この記録は真実のものとはなり得ないだろう。私が日記の形式を採ることにしたのはそのためである。後になって書かれたとはいえ、メモや手紙やごく新鮮な記憶の助けを借りて再構成されたこの日記は、細かい点まで正確である。私はこの中で、自分の驚愕、讃嘆、憤慨、躊躇、誤謬などの時間的な順序を、忠実にまもった。私の第一印象が後になってはじめて解明されることもしばしばある。重要と思われるテーマについては、関連して参照すべき箇所を注で示した。しかし私は、全体から切り離したいかなる部分も決定的な断定とはなっていないことを、強調しておきたいと思う。それに、しばしば私は決定的な見解に達しないままに終っている。だから私の意見なるものは、私

の躊躇逡巡、補加、訂正などの総和ということになる。この記録の作成は、いかなる選択基準にも左右されていない。これは私自身に起こったことの記録であり、それ以上でも以下でもない。こんなものを、こんなふうに私は見た、というだけで、私はそれ以上のことを語ろうとはしなかったのである。

一九四七年一月二十五日

何かがまさに起こりつつある。一生のうちで、今何かが起こっているという瞬間は、数えるほどしかない。幾筋かの光の刷毛が、赤や緑の信号灯のきらめく地面をさーっと掃く。祝祭の晩、夜のお祭り、私の祭りだ。何かが起こっている。プロペラがますます早く回転する。モーターがうなる。私の心臓はそれについてゆけない。あっという間に赤い滑走路照明灯が地べたに叩きつけられる。遠くにパリの灯がゆれる。暗い紺色の深淵から浮きあがる慎ましやかな星のように。

さてとうとう。何かが起こった。私はニューヨークへ飛んでいる。これはほんとうなのだ。スピーカーが《ニューヨーク行きのお客さまは……》と呼んだし、その声は駅のホームでスピーカーを通して聞くすべての声に共通の、あの耳慣れた抑揚だった。パリ＝マルセイユ、パリ＝ロンドン、パリ＝ニューヨーク。これもただの旅行、ある地点から他の地点への移行に過ぎないわけだ。あの声はそう語っていた。スチュワードの無感動な表情にもそう書いてある。彼は商売柄、私がアメリカへ飛びつつあることをごく当り前だと思っている。世界はひとつしかなく、ニューヨークもその世界の一都市にすぎないわけだ。いや違う。読める限り読んだ本、映画、写真、体験談、そうした一切のものにもかかわらず、ニューヨークは私の過去においては依然として伝説的な都なのである。現実から伝説へ、そこには通じる道がない。古いヨーロッパと向かい合って、一億六千万の人口を擁する大陸の玄関口にあるニューヨークは、未来に属している。私自身のこの人生を一気にぴょんと跳び越えるなんて、いったいどうしたらできるのだろう？　私は自分に言い

きかせようとする。ニューヨークは現実で、ちゃんとそこにあるのだ、と。でも私の感動は前と変らない。ふつうの場合、旅行することは私の世界に新しい対象を併合しようと試みることである。その企てはそれだけでも人を夢中にさせるものだ。しかし今日は違う。私は自分の人生の外に出るような気がする。怒りを通じてか希望を通じてか知らないが、とにかく何物かが私の前に開示されようとしている。私自身が別人になるという異常な冒険を味わうことができるほど充実した、豊かな、予測できないひとつの世界が。

この飛行機のおだやかな飛翔からしてひとつの約束である。もうすでに私は脱出したのだ。大地は異質な大気の底に沈んでしまった。私はもはやどこにもいない。私は別のところにいる。それに、今は何時なのだろう？季節は？　アゾレス諸島は夏で、大きな麦藁帽子のかげになっている。ニューファウンドランドの大地は雪と雨氷におおわれている。パリは八時でニューヨークは二時。時間と空間がごちゃまぜになる。私が結びつけられているこの大きな翼、雲と星のあいだを行くこの不動の翼の奔放さにくらべれば、私の空想など慎ましやかなものだ。

私は眠った。目をあける。深淵をおおいつくした黒い空に、突然水平に固定した花火がひろがる。色とりどりの星、光の網目、輪、束。きらめくシャンデリアのあいだに水がゆれている。狂乱のヴェネツィアとでも言おうか。さもなければ何かすばらしい戦勝祝賀祭が地上で祝われているのか……《ボストンです》とスチュワデスが言う。ボストン。ピューリタン的なその名が連想させるのは、おとなしい石の街である。火と金色で平原のビロードの上に描かれたこの町並は無軌道そのものに見える。ボストン。アメリカ。私はむさぼるように目をこらす。私はまだ、「私はアメリカにいる」とは言えない。アメリカの大地に私をたたきつけるには一分でこと足りるだろうが、しかし私はどの大陸にも属さない空、大空にいる。私の下で夜がふたたび閉ざされる。アメリカは眠っている。が、ところどころに新たな祝祭の花火がひろがる。町、村だ。この国では、夜になると石や煉瓦が焔のきららに変じてしまうらしい。村落のひとつひとつがまばゆいクリスマスツリーなのだ。

空から地上に降りること、それはちょっとした受難だ。澄みわたった重さのない空気が次第に濃くなって、地殻にくっついた気層と変じ、逆流に乱される。悠揚たる飛翔は細心な航行となる。こめかみはぶんぶんうなり、耳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

が痛い。なるほど私の鼓膜は、たしかに博物学の本に書いてある通り、一枚の膜なのだ。ぴんと張りつめ、振動し、痛む。さっきまで私は全身これ凝視と期待以外の何ものでもなかった。今や私は一種の袋である胃と、骨質のうつわである頭蓋と、膜である鼓膜を持つ、いわばばらばらの部分品を下手に組みたてた機械なのだ。私は目をつぶった。ふたたび目をあけると、空の星は残らず地上に落ちていた。宝石、紅玉のきらめき、ルビーの房、トパーズの花、ダイヤの首飾り。これほど目を奪われ、これほどわくわくするのは、子供の時以来絶えてなかった。あの頃私が憧れた、私が一度ものぞいたことのないアラビアンナイトの宝物のすべて、それがここにある。私が入ったことのないお祭りの見世物小屋、メリーゴーラウンド、魔法の町（マジックシティ）やルナ・パーク、それがここにある。そしてまた、あのシャトレ劇場の舞台装置、バースデーケーキ、音楽の溢れる夜の客間に輝くシャンデリア、それらが私に返ってきた、私に与えられた。枝の主日〔復活祭の前の日曜日。〕に私があんなにも欲しがった、あの、砂糖をまぶした透明なボンボンの首飾りや腕輪や房のさがったつげの枝、あれがそこにある。私は自分の首や腕にその砂糖のアクセサリーをつけよう。その水晶の玉を噛み割ろう。きらきらした砂糖の膜を口の中で押し砕こう。そうすれば、黒すぐりやパイナップルの味が舌にするだろう。飛行機は下降してゆく。機体が縦にゆれる。風や霧や空気の重さに縛られているこの飛行機は、今、原始的な、不安な生を生きている。この飛行機は大自然に属しているのだ。ずんずん下降する。真珠の首飾りは道路になる。水晶の飾り玉は街灯だ。ひとつの都会が私の前に差出だされている。ここには何と何があるはずだというその楽しみを数えあげるには、子供たちの持つ単語でさえ貧しすぎる。工場の煙突が空ですーっと倒れる。並木道に沿うた建物がはっきりと見わけられる。そして私は「あの通りを歩くだろう」と考える。煙突がもう一度倒れ、われわれは旋回する。隣りの女性が、《エンジンの音が変だわ》とつぶやく。われわれは一方の翼のほうにかしいだまま旋回を続けている。とっさに私が考えたのは、「死にたくない。今はいやだ。あの街の灯が消えてほしくない」。煙突は見えなくなった。赤い照明灯が近づき、私は滑走路に触れる車輪のショックを感じる。私たちは順番を待っていただけなのだ。ラ・ガーディア空港では一分間に一台の飛行機が着陸するのである。

自然力は征服され、距離は打破された。が、ニューヨ

ークは消え去ってしまった。ニューヨークに到達するためには、地上の生活の狭いトンネルをくぐらねばならない。書類が手から手へ渡される。一人の医師が、まるでわれわれが売り馬ででもあるかのように、私たちの歯をうわのそらで検査する。私たちは暖房のききすぎた一室に案内され、そこで待つ。頭が重く、息がつまりそうだ。《アメリカではどこへいっても暑すぎる》と私は誰かから注意されていた。するとこのぼうっとなるような暑さ、これがつまりアメリカなのだ。グラビア雑誌の微笑を浮かべた艶やかな髪の若い女が差出すオレンジジュース、これもアメリカだ。アメリカは時間をかけて発見しなければなるまい。大粒のボンボンのように一気にほうばるわけにはいかないだろう。あのクリスマスツリーははるか彼方に遠のいたし、光の噴水もそうだ。私は二度とあの祭りの表情を見ることはないだろう。あれは人間の重みのすべてをかけて大地をふみしめている人びとのために輝いているのではないのだ。私の名が呼ばれる。一人の役人が、中世の憲章のように朱印で飾られた私の美しい厚紙のヴィザを調べる。彼は頭を振りながら、《あなたは美しい国からいらっしゃった》と言う、《……でもあなたがお着きになったこの国は、もっともっと美しいですよ》。彼は私に八ドル請求する。そのあと税関吏が私のスーツケースをひととおり検査し、私は人びとが居眠りをしたり退屈そうにしている円形の大きなホールに入る。今や私は自由の身で、扉の外にはニューヨークが待っているのだ。

D・Pが私を迎えに来てくれた。私は彼女とは知合いではない。こうして私は初対面の若い女性について、私の眼が何を見てもまださっぱりわからない町を通って連れ去られて行くことになる。自動車は実になめらかに走り、タイヤの下の路面は実に滑りがいいので、土も空気と同様に触ることのできないものだと思われるほどだ。私たちは川沿いに進み、鉄橋を渡る。と、隣りの女性は突然言う、《ブロードウェイです》。そのとたん、私にも見える。煌々と輝く大通りが見える。そこを何百台とも知れぬ自動車が、まるで磁力を持った神意が天上から操っているのかと思われるほど整然と走り、停止し、また発車する。街路の規則正しい碁盤縞、直角に交わる十字路の不動の稜線、信号の赤と緑の数学的な交替、それらは町がひっそり静まりかえっていると感じさせるくらい、秩序と平和の印象を与える。実際、クラクションもエンジンのからふかしの音も聞えない。これで私は、フラン

スを訪れるアメリカ人たちが、町角でブレーキがキーッときしむすさまじい音に驚く理由がわかった。ここでは自動車は、かすかな蒸気の間歇泉をふき出すフェルトの車道を滑ってゆくのだ。まるでサイレント映画だ。ぴかぴかした車は自動車ショーの会場から出てきたばかりのようだ。そして地面はオランダの台所のタイルの床と同じくらい清潔に見える。光が汚れをすっかり洗い落してしまったのだ。それは超自然的な光で、アスファルトを変貌させ、ショーウインドーに並んだ花や、絹のドレスや、ボンボン、ナイロン靴下、手袋、バッグ、靴、毛皮、リボンなどを後光で包んでしまう。目をこらして私は眺める。おそらく私はこの静けさ、豪奢、平和を、ふたたび見ることはないだろう。セントラル・パークを囲むこの黒熔岩の城壁、石と光のこの巨大なドミノを二度と見ることはないだろう。明日はニューヨークは一都市になってしまう。しかし今夜は魔法の世界に属している。私たちは駐車場が見つからないでぐるぐるまわる。それは一種の典礼の要求することであり、私は新参者の好奇心をもってそれに服従する。赤や金の棕櫚に飾られたレストランでの夕食は入門式の食事であり、マーティニーもえび料理も神聖な味がする。

八番街四四丁目の巨大なホテルに、D・Pは私の部屋を予約しておいてくれた。彼女は、その部屋をいつまで借りていていいかと問合わせる。《お客さまがおとなしくしていてくだされば、いつまででもお好きなだけ》と、支配人は大きく笑って言う。どうやら私は運がよかったらしい。宿を見つけるのは容易でないのだ。D・Pは帰ったが私は自分の部屋には上らない。私はブロードウェイを歩いてみる。空気はしめって暖い。南国の冬。結局のところニューヨークはリスボンと同じ緯度にあるわけだ。私は歩く。ブロードウェイ。タイムズ・スクエア。四二丁目。私の眼は思い出を持たず、私の足は計画を持たない。過去と未来とから切り離された純粋の現存。まことに純粋で繊弱なこの現存はわれながら半信半疑であり、世界もまた宙に浮いている。私は「これがニューヨークだ」と言ってみる。が心からそれが信じられない。レールもなし航跡もなし――私は自分の道程を地球の表面に印してはこなかった。この都会とパリとは同一体系のふたつの要素として結ばれていない。めいめいが個有の時間を持ち、相手のそれとは一致しない。両者はいっしょに実在せず、私は一方から他方に移ることができなかった。私はもはやパリにはいない。が、ここにもいな

い。私の現存は借りものの現存である。この歩道には私のための場所はない。だしぬけに私が落ちてきたこの異質な世界は、私を待ってはいなかった。それは私なしで充足していた。私なしで充足している。これは私の存在しない世界であり、私は自己の完全な不在のなかでそれを把握するのである。私とすれちがうこの群衆に、私は属していない。私は自分の姿が誰からも見えないと感じる。私は幽霊の微行をやっている。私はふたたび肉体を取戻すことに成功するだろうか？

一月二十六日

夜の眠りのいちばん深いところで、言葉のない声が言う、「何かが私に起こった」。私はまた眠る。自分の身に襲いかかったのが大きな幸運か災難かわからない。何かが私に起こった。夢の中でよくあるように、私は死んだのかも知れない。目がさめたら私は死の向う側にいるのかもしれない。目をあけながら、私はこわい。そして思い出す。ここはほんとうの「あの世」ではない。ここはニューヨークだ。

まぼろしではなかった。ニューヨークはちゃんとそこにある。何もかもほんとうなのだ。真実はこの青空や、しっとりと暖い大気の中に、ゆうべの不確かな眩惑よりもずっと堂々と照り輝いている。午前九時。日曜日。通りには人影がない。ネオンの看板はまだ光が消え残っている。人っ子ひとり通らず、一台の車もない。八番街の直線の見とおしを邪魔するものは何ひとつない。立方体、角壔、平行六面体、建物は抽象的な固体であり、面はふたつの立体の抽象的な交わりだ。建築材料には密度も組織もない。それは鋳型に流しこんだ空間そのものなのである。私は動かず、眺める。私はここにいる。そしてニューヨークは私のものになろうとしている。この喜びには覚えがある。十五年も昔のことだ。私は駅を出て、どっしりとした石段の上から足もとにひろがるマルセイユの町の屋根を見わたしていた。私はその未知の町で、一人きりで一年か二年を過ごすはずだった。私は動かず、眺めていた。そして考えた。「この見知らぬ町、これが私自身の未来であり、私の過去になるのだ」と。私なしで何年も、何百年も経てきたこの家々のあいだに、何千人何万人の、私ではなかった人びと、私ではない人びとのための道路が敷かれている。しかし今こうして私はそこを歩いている。ブロードウェイをくだってゆく。これ

はたしかに私なのだ。私のために敷かれたのではない、私の生活がまだ轍を残していない、過去のにおいのまったくしない通りを、私は歩いている。ここでは誰ひとり私の存在に目をとめる者はない。私はまだ幽霊であり、町の何ひとつ乱すことなくそこに忍びこんでゆく。しかしこれから先は、私の生活はこの道路や家々の直線と合体するだろう。ニューヨークは私のものとなり、私はニューヨークのものとなるだろう。

私はカウンターでオレンジジュースを飲み、靴みがきの店で、小さなふみ段で高くなった三台の椅子のひとつに坐る。少しずつ私は肉体化し、町はなじんでくる。面は家の前面(ファサード)になり、立体は家になる。車道には風が埃や紙くずをまきあげている。ワシントン広場を過ぎると、数字がそれまでの権限を失う。直角は崩れ、通りは数字でなく名前で呼ばれ、直線は曲り、からみ合う。私はヨーロッパの都会にいる時と同じように迷う。建物は三階か四階しかなく、赤ともオーカー色とも黒ともつかない濃厚な色をしている。家の前面にジグザグ形についている非常階段に洗濯物が干してある。太陽を約束するこの洗濯物、町角に坐る靴みがき、水平な屋根、それらはなんとなく南国の町を連想させるが、それでいて家々のくたびれた赤い色彩はロンドンの濃霧を思わせる。実はこの界隈は私の知っている何ものにも似ていないのだ。でも私は自分がここを愛するだろうということを知っている。

風景が変る。風景という言葉こそ、人間に見すてられ、空に侵入されたこの町にふさわしい。空は摩天楼の上方にそびえ、まっすぐな街路におし入る。空はこの町が取りいれるにはあまりにも広大であり、町からはみ出している。それは山の空だ。私は高い絶壁のあいだの、日光のさしこまぬ峡谷の底を歩いているのだ。塩の香がただよう。精密に計算された均衡を持つこれらのビルには、人間の歴史は刻まれていない。それはパリやローマの家家よりも、むしろ先史時代の洞窟に近い。パリやローマでは、歴史が大地のはらわたまで浸みこんでいる。パリは地球の中心部にまで深くのびている。ニューヨークのバッテリー公園はそれほど深く根をおろしていない。地下鉄や下水道や暖房配管の下の岩は、手つかずで非人間的である。この岩と自由な空のあいだ、巨大なビルの影にひたっているウォール街やブロードウェイは、今朝は大自然に属している。ブロードウェイのまん中にある小さな黒い教会と、平たい墓石の並ぶその墓地とは、大西

洋岸の荒涼とした海辺に立つ十字架像と同じくらい思いがけない感じであり、感動的である。

太陽があまりにも美しく、ハドソン川の水があまりにも緑だったので、私は中西部から来たおのぼりさんたちを自由の女神像まで運ぶ船に乗った。しかし私は砦に似たその小さな島には降りない。私はただバッテリー公園〔もと砲台があった〕を、映画でよく見た角度から見たかったのである。私はそれを見る。遠くからだと、その塔はいかにも脆そうに見える。垂直な稜線上にあまりにも正確にのっているので、ほんの僅かな振動を受けても、カルタのお城のようにひとたまりもなく崩れてしまいそうだ。船が近づくとその土台はずっとがっちりしてくるが、すぐに陥落しそうな線の感じはどこまでもつきまとう。砲撃手にとってはさぞ痛快だろう！

このあたりにはレストランが何百もあるが、日曜日はぜんぶ休業している。やっと見つけた一軒は超満員で、私はウェイトレスにせかされながら急いで食べる。休息の場所がまったくない。自然はもっと情け深い。ニューヨークはこの薄情さにおいて人間的な町に戻る。パール街と高架電車、チャタム広場、中国人街、バワリー街、私は疲れてくる。いろんなスローガンが私の頭の中を往来する。「コントラストの都会」。無数の窓が並ぶ建物の下に、香料や包装紙のにおいのただよう路地、それはひとつのコントラストだ。ひと足進むごとに私はコントラストにぶつかるし、それらはすべてそれぞれに異なっている。「屹立する都会」、「熱狂的な幾何学」、「狂った幾何学」、それはまさにこの摩天楼、家のたたずまい、街路のことである。そのとおりだ。私はまた「ニューヨークとその聖堂」という言葉もたびたび読んだ。私だって何かよい言葉を思いついたかもしれない。これらの古い常套句はどれも空疎に思われる。そのくせ発見のみずみずしさの中にありながら、「コントラスト」とか「聖堂」とかいう言葉がやっぱり私の唇にのぼってくる。そして私は、それらの言葉が捉えようとした現実が変質していないのに、言葉だけがひどく色あせて感じられるのに驚く。私はもっと具体的な言葉も聞いた、《バワリー界隈では、日曜日には酔払いが歩道に寝ている》。ここはバワリーだ。酔払いが歩道に寝ている。言葉が言い表わそうとしたのはまさにこのことなのに、その正確さが私を面くらわせる。これほど真実なのに、なぜこれほど空疎なのだろう？　私がニューヨークを把握するのは言葉によってではない。私はこの町を把握しようとはもはや考

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.